野菜１（果菜類）

ト マ ト[ミニトマトを除く]（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
モザイク病(トマトモザイクウイルス、キュウリモザイクウイルス)	1. 発病株は抜取り、苗床や本畑に発病株の根をできるだけ残さないようにする。 2. 摘芯、摘芽等の作業中に発病株に触れたときは必ず石けんで手を洗う。 3. 露地栽培ではポリエチレンまたはビニルフィルムでマルチする。また、温室やビニルハウスでの秋作では、苗床期から10月下旬まで寒冷紗を張り、アブラムシ類の飛来を防ぐ。	1. トマトモザイクウイルス（ToMV）は種子伝染、土壌伝染、汁液伝染するので防除方法の1～2の項を実施する。 2. 使用する品種のトマトモザイクウイルス（ToMV）抵抗性遺伝子型（Tm-1とTm-2もしくはTm2a）が穂木と台木で異なると、ToMV感染した際に過敏感反応を起こす恐れがある。 3. キュウリモザイクウイルス(CMV)は主としてアブラムシ類により媒介されるので、アブラムシ類の防除を徹底する。
黄化えそ病（トマト黄化えそウイルス・TSWV）	1. 発病株は抜き取って処分する。 2. 施設栽培では施設開口部に防虫網を設置（2 物理的防除法(4)防虫網を用いた害虫飛来防止法を参照）し、野外からのミカンキイロアザミウマの侵入を防ぐ。 3. ハウス周辺の除草を徹底する。 4. アザミウマ類を防除する。	1. 本病は主にミカンキイロアザミウマが伝搬するので、本虫の防除を徹底する。 2. 本虫はハウス周辺の一部の雑草でも増殖する。
黄化葉巻病(トマトイエローリーフカールウイルス・TYLCV)	1. 発病株は抜き取って処分する。 2. 施設栽培では施設開口部に防虫網を設置（2 物理的防除法(4)防虫網を用いた害虫飛来防止法を参照）し、野外からのタバココナジラミの侵入を防ぐ。 3. ハウス周辺の除草を徹底し、トマトの残さを放置しない。 4. タバココナジラミを防除する。 5. 耐病性品種を利用する。	1. 育苗期から定植初期にウイルスに感染すると被害が大きいので特に注意する。 2. タバココナジラミはハウス周辺の一部の雑草でも増殖する。 3. タバココナジラミは薬剤抵抗性が発達しているので、薬剤散布後に効果を確認する。 4. 耐病性品種であってもタバココナジラミを多発させないように注意する。
黄化病(トマトクロロシスウイルス・ToCV)	1. 発病株は抜き取って処分する。 2. 施設栽培では施設開口部に防虫網を設置（2 物理的防除法(4)防虫網を用いた害虫飛来防止法を参照）し、野外からのコナジラミ類の侵入を防ぐ。 3. ハウス周辺の除草を徹底し、トマトの残さを放置しない。 4. コナジラミ類を防除する。	1. 育苗期から定植初期にウイルスに感染すると被害が大きいので特に注意する。 2. コナジラミ類はハウス周辺の一部の雑草でも増殖する。 3. タバココナジラミは薬剤抵抗性が発達しているので、薬剤散布後に効果を確認する。
黒点根腐病	1. 抵抗性品種（バルカン、ドクターKなど）を台木として接木栽培する。 2. 初期発病株は見つけしだい抜き取って処分する。発病後期のものは収穫後集めて処分する。 3.発病が増加した場合には、次の方法で処理を行う。夏の高温期(7月上旬～9月上旬)に10a当たり稲わら1tと石灰窒素100kgを土壌中にすき込み、湛水した後ビニルマルチを行うか、又は還元状態が作り易い土壌では代かき湛水のみでハウスを密閉する。	1. ハウス密閉処理はハウスのビニールの汚れのひどい時は洗浄する。 2. 土壌消毒法の中の土壌還元消毒法の項を参照する。
しり腐病（生理障害）	1. しり腐れ病は果実のカルシウム欠乏による生理障害である。	
灰色疫病 根腐疫病 （養液栽培）	1. 発病したベット及び資材はケミクロンG 1000倍液で1時間以上浸漬洗浄する。 2. 栽培環境に注意し、土砂が養液の中に入らないようにする。	1. ケミクロンGは強力な酸化剤のため、取り扱う際には次の事項に注意する。 (1)消毒は日陰で行う。 (2)金属類を使用した場合は必ず水洗いする。
ばら色かび病	1. 罹病残さを除去し、ほ場衛生に注意する。	1. 腐生性の強い菌で、罹病残さが主要な伝染源となる。

ミニトマト（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
モザイク病(トマトモザイクウイルス、キュウリモザイクウイルス)	1. 発病株は抜き取り、苗床や本畑に発病株の根をできるだけ残さないようにする。 2. 摘心、摘芽等の作業中に発病株に触れたときは必ず石けんで手を洗う。 3. 露地栽培ではポリエチレンまたはビニルフィルムでマルチする。また、温室やビニルハウスでの秋作では、苗床期から10月下旬まで寒冷紗を張り、アブラムシ類の飛来を防ぐ。	1. トマトモザイクウイルス（ToMV）は種子伝染、土壌伝染、汁液伝染するので防除方法の1～2の項を実施する。 2. 使用する品種のトマトモザイクウイルス（ToMV）抵抗性遺伝子型（Tm-1とTm-2もしくはTm2a）が穂木と台木で異なると、ToMV感染した際に過敏感反応を起こす恐れがある。 3. キュウリモザイクウイルス（CMV）は主としてアブラムシ類により媒介されるので、アブラムシ類の防除を徹底する。
黄化えそ病（トマト黄化えそウイルス・TSWV）	1. 発病株は抜き取って処分する。 2. 施設栽培では施設開口部に防虫網を設置（2 物理的防除法(4)防虫網を用いた害虫飛来防止法を参照）し、野外からのミカンキイロアザミウマの侵入を防ぐ。 3. ハウス周辺の除草を徹底する。 4. アザミウマ類を防除する。	1. 本病は主にミカンキイロアザミウマが伝搬するので、本虫の防除を徹底する。 2. 本虫はハウス周辺の一部の雑草でも増殖する。
黄化葉巻病(トマトイエローリーフカールウイルス・TYLCV)	1. 発病株は抜き取って処分する。 2. 施設栽培では施設開口部に防虫網を設置（2 物理的防除法(4)防虫網を用いた害虫飛来防止法を参照）し、野外からのタバココナジラミの侵入を防ぐ。 3. ハウス周辺の除草を徹底し、トマトの残さを放置しない。 4. タバココナジラミを防除する。 5. 耐病性品種を利用する。	1. 育苗期から定植初期にウイルスに感染すると被害が大きいので特に注意する。 2. タバココナジラミはハウス周辺の一部の雑草でも増殖する。 3. タバココナジラミは薬剤抵抗性が発達しているので、薬剤散布後に効果を確認する。
黄化病(トマトクロロシスウイルス・ToCV)	1. 発病株は抜き取って処分する。 2. 施設栽培では施設開口部に防虫網を設置（2 物理的防除法(4)防虫網を用いた害虫飛来防止法を参照）し、野外からのコナジラミ類の侵入を防ぐ。 3. ハウス周辺の除草を徹底し、トマトの残さを放置しない。 4. コナジラミ類を防除する。	1. 育苗期から定植初期にウイルスに感染すると被害が大きいので特に注意する。 2. コナジラミ類はハウス周辺の一部の雑草でも増殖する。 3. タバココナジラミは薬剤抵抗性が発達しているので、薬剤散布後に効果を確認する。
かいよう病	1. 床枠、支柱などの資材はケミクロンGで消毒する。 2. 被害株はそのまま放置しないで抜き取って処分する。	1. 摘心、摘芽の時に伝染しないように発病株に触わらない。 2. 発病株は抜き取り処分する。 3. ケミクロンGは強力な酸化剤のため、取り扱う際には次の事項に注意する。 (1)消毒は日陰で行う。 (2)金属類に使用した場合には必ず水洗いする。
黒点根腐病	1. 抵抗性品種（マグネットなど）を台木として接木栽培する。 2. 初期発病株は見つけしだい抜き取って処分する。発病後期のものは収穫後集めて処分する。 3.発病が増加した場合には、次の方法で処理を行う。夏の高温期(7月上旬～9月上旬)に10a当たり稲わら1tと石灰窒素100kgを土壌中にすき込み、湛水した後ビニルマルチを行うか、又は還元状態が作り易い土壌では代かき湛水のみでハウスを密閉する。	1. ハウス密閉処理はハウスのビニールの汚れのひどい時は洗浄する。 2. 土壌消毒法の中の土壌還元消毒法の項を参照する。
斑点細菌病	1. 換気をはかり、多湿条件下で栽培しない。 2. 野菜類の斑点細菌病に登録のある薬剤で防除する。	
灰色疫病 根腐疫病 (養液栽培)	1. 発病したベット及び資材はケミクロンG 1000倍液で1時間以上浸漬洗浄する。 2. 栽培環境に注意し、土砂が養液の中に入らないようにする。	1. ケミクロンGは強力な酸化剤のため、取り扱う際には次の事項に注意する。 (1)消毒は日陰で行う。 (2)金属類を使用した場合は必ず水洗いする。
ばら色かび病	1. 罹病残さを除去し、ほ場衛生に注意する。	1. 腐生性の強い菌で、罹病残さが主要な伝染源となる。
しり腐病（生理障害）	1. しり腐れ病は果実のカルシウム欠乏による生理障害である。	

なす（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
綿 疫 病	1. 敷きわら又はポリマルチを行う。 2. 排水をはかり多湿にしない。	1. 梅雨時に発生が多いので注意する。
モザイク病	アブラムシ類を防除する。	

ピーマン[シシトウを除く]（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
モザイク病(タバコモザイクウイルス,キュウリモザイクウイルス)	1. 発病株は早期に抜き取る。 2. 生育初期からアブラムシ類を防除する。 3. 温室やビニルハウスでは苗床期から開口部に防虫網を設置（2 物理的防除法(4)防虫網を用いた害虫飛来防止法を参照）し、アブラムシ類の侵入を防止する。	1. タバコモザイクウイルス（TMV）は種子伝染や汁液伝染、土壌伝染し、キュウリモザイクウイルス（CMV）は主にアブラムシ類によって媒介される。

きゅうり（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
モザイク病 (キュウリモザイクウイルス,カボチャモザイクウイルス,ズッキーニ黄斑モザイクウイルス,パパイヤ輪点ウイルス)	1. 生育初期に有翅アブラムシの防除を行う。 2. 施設栽培では育苗期から10月下旬まで施設開口部に防虫網を設置（2 物理的防除法(4)防虫網を用いた害虫飛来防止法を参照）し、有翅アブラムシの飛来を防止する。	1. アブラムシ類が伝染する。 2. 夏秋期に栽培するものに多発しやすいので注意する。
緑斑モザイク病(KGMMV)	1. 種子伝染するので種子は第3りん酸ソーダの10倍液に20分間浸漬後よく水洗いする。 2. 苗床を90℃以上30分蒸気消毒する。 3. 苗床用資材や農具の消毒は苗床の土壌消毒と一緒に行う。 4. 苗床や本ぽでの発病は早期発見に努め、抜き取り処分する。	1. 接木用カミソリなど刃物は煮沸消毒する。 2. 接触伝染性が強いので作業の都度手や農具は中性洗剤で洗う。特に発病株の取扱後はていねいに行う。
黄化えそ病(MYSV)	1. 感染が疑われる苗は使用しない。 2. 発病株の早期発見に努め、発見した場合は直ちに抜き取る。 3. ほ場内及び周辺の除草を徹底する。 4. 防虫網（0.4mm目合い以下、赤色網も効果あり）、紫外線カットフィルム等を利用して、媒介虫の侵入を防ぐ。 5. 育苗期からミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。 6. 収穫後は施設を密閉し、株を完全に枯死させるとともに、施設内の媒介虫を死滅させる。	1. ミナミキイロアザミウマが病原ウイルスを媒介する。 2. 青色粘着トラップを施設内に設置し、媒介虫の早期発見に努める。 3. 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布を行う。
コナダニ類	1. 稲わらや有機質肥料を多用しない。	1. 育苗期の発生が多い。 2. 発育適温は25～28℃で、多湿なほど発育が良い。

温室メロン（野菜類）

病害虫	防　除　方　法	防除上の注意事項
モザイク病	●CMV、WMV、PRSV－W、ZYMVの防除 1. アブラムシ類を防除する。 2. 温室やハウスの窓、出入口には防虫網を張って有翅アブラムシの飛来を防ぐ（2物理的防除法（4）防虫網を用いた害虫飛来防止法を参照）。 3. 発病株は抜き取って処分する。 4. 発病株に触れた手や刃物は石けん液でよく洗い、健全株への伝染を防ぐ。 ●CGMMVの防除 1. 健全株から採った種子を使う。 2. 種子は70℃で72時間乾熱消毒を行う。 3. 床土、作土、鉢、支柱、その他の資材は90℃以上で30分間蒸気消毒する。 4. 摘心、摘葉、かん水などの作業で発病株に触れたら石けん水でよく洗い、健全株への伝染を防ぐ。	1. 夏から秋にかけて発病が多いので注意する。 2. モザイク病の原因には、CMV(ｷｭｳﾘﾓｻﾞｲｸｳｲﾙｽ)、WMV(ｶﾎﾞﾁｬﾓｻﾞｲｸｳｲﾙｽ)、ZYMY(ｽﾞｯｷｰﾆ黄斑ﾓｻﾞｲｸｳｲﾙｽ)、PRSV－W(ﾊﾟﾊﾟｲﾔ輪点ｳｲﾙｽ)、CGMMV(ｽｲｶ緑斑ﾓｻﾞｲｸｳｲﾙｽ)がある。 CMV、WMV、ZYMV、PRSV－Wはアブラムシ類及び汁液で、CGMMVは汁液、種子、土壌、接触で伝染するのでウイルスの種類に応じた対策をとる。 3. 種子の乾熱消毒は、発芽障害を防ぐため、事前に乾燥剤でよく乾燥させておく。
黄化えそ病（MYSV）	1. 感染が疑われる苗は使用しない。 2. 発病株の早期発見に努め、発見した場合は直ちに抜き取る。 3. 施設内及び周辺の除草を徹底する。 4. 防虫網（0.4mm目合い以下、赤色網も効果あり）、紫外線カットフィルム等を利用して、媒介虫の侵入を防ぐ。 5. 育苗期からミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。 6. 収穫後は施設を密閉し、株を完全に枯死させるとともに、施設内の媒介虫を死滅させる。	1. ミナミキイロアザミウマが病原ウイルスを媒介する。 2. 青色や、より誘札効果が高い青緑色粘着トラップを施設内に設置し、媒介虫の早期発見に努める。 3. 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布を行う。 4. 発生しているミナミキイロアザミウマ個体群の薬剤感受性低下が著しい場合は、成虫の定着抑制効果がある赤色LEDの日中＋前後1時間照射や、成虫誘殺効果が高い青緑色粘着トラップの大量設置と共に、卵や幼虫を捕食する天敵アザミウマの放飼を検討する。
退緑黄化病（CCYV）	1. 感染が疑われる苗は使用しない。 2. 発病株の早期発見に努め、発見した場合は直ちに抜き取る。 3. 施設内及び周辺の除草を徹底する。 4. 防虫網（0.4mm目合い以下）、紫外線カットフィルム等を利用して、媒介虫の侵入を防ぐ。 5. 育苗期からタバココナジラミの防除を徹底する。 6. 収穫後は施設を密閉し、株を完全に枯死させるとともに、施設内の媒介虫を死滅させる。	1. タバココナジラミが病原ウイルスを媒介する。 2. 黄色粘着トラップを施設内に設置し、媒介虫の早期発見に努める。 3. 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布を行う。 4. ウリ科作物に容易に感染し拡大するため、温室周辺ではウリ科作物を栽培しないことが望ましい。 5. 保毒虫の拡散により周辺雑草も保毒する。
根 腐 病	1. 作土（床土、堆肥を含む）は次の方法で消毒する。 蒸気消毒80℃以上30分	1. 病原菌はヘチマ以外のウリ類に寄生する。
黒かび病	1. 温室、荷造り室及びその周辺を清潔にする。 2. 荷造り時に刃物と果梗の切口を食品添加物用エチルアルコールで消毒する。	1. 病原菌は、付近の有機物で生存していて、切口から入り、市場で果実腐敗を起こす。 2. 梅雨期などの曇雨天の続く時に発生が多い。
褐色腐敗病	1. 温室周辺は清潔にし、ほ場衛生に努める。 2. 発病株は早期に除去し、土中深く埋めて2次伝染を防止する。 3. ネット期に多湿環境にならないように室内の乾燥に努める。	1. 発病後は、ネット傷から感染し、主に栽培中に果実腐敗を起こすが、市場でも発病する。 2. 発病は、曇雨天の続く梅雨期、秋雨期に多い。
ばら色かび病	1. 罹病残さを除去し、ほ場衛生に注意する。	1. 病原菌は腐生性の強い菌で、作物残さ等で生息し感染源となる。
毛 根 病	1.土壌中の細菌の一種が病原となるので、土壌消毒を適確に行う。 2. 資材や農具で蒸気消毒できるものは床土消毒の際に一緒に行う。 3. 発病株の近くでは育苗しない。	1.土中の病原菌は加熱しても死滅しにくい状態になっているため、蒸気消毒は90℃以上90分以上を確保する。 2. 病原菌は乾燥した土の中でも長期間生存するため、蒸気消毒できない器具は、土を良く洗い落として乾燥させる。消毒液を用いる場合も先に土を洗い落とす。

すいか（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
緑斑モザイク病(CGMMV)	1. 苗床の土壌は次の方法で消毒したものを使う。蒸気消毒 90℃以上30分 2. 苗床用資材や農具の消毒は苗床の土壌消毒の際一緒に行う。 3. 苗床本ぽでの発病株は早期発見に努め、抜き取り、焼きすてる。 4. 接触による伝染が強いので、作業の都度手や農具は中性洗剤で洗う。特に発病株の取扱い後はていねいに行う。	1. 病原ウイルスは汁液、種子、土壌、接触で伝染する。 2. 土壌消毒の項を参照。 3. 接木用カミソリなど刃物は煮沸消毒する。

まくわうり（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
つる割病	1. 発病ほ場は数年ウリ類の栽培を避ける。	
モザイク病	1. 健全株から採った種子を使う。 2. 生育初期に薬剤を散布して有翅アブラムシの駆除を行う。	1. モザイク病の原因ウイルスはキュウリモザイクウイルス(CMV)である。 2. アブラムシ媒介及び汁液伝染する。

い ち ご（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
ウイルス病	1. ウイルス無病苗から採った苗を使用する。 2. アブラムシ伝染するので、アブラムシの防除に努める(アブラムシの項参照)。	1. ウイルス病の病原には、アブラムシによって媒介されるストロベリ・モットルウイルス（SMoV）、ストロベリ・ベインバンデングウイルス（SVBV）、ストロベリ・マイルドイエローエッジウイルス（SMYEV）、ストロベリ・クリンクルウイルス（SCrV）、イチゴ潜在Cウイルス（SLCV)と土壌伝染をするタバコモザイクウイルス（TMV）、タバコネクロシスウイルス（TNV）がある。 2. ウイルス無病苗は栽培を続けると時間の経過とともに数種類のウイルスに感染する。従って約3年をめどに新しい無病苗に更新する。
乾 腐 病	1. 採苗床及び定植床は、次の方法で土壌消毒を行う。蒸気消毒 80℃以上10～15分 2. 過剰施肥を避け、適正な土壌管理を行う。 3. 無病苗から採った苗を使用する。 4. 発病株は抜き取って焼却処分する。 5. 発病したベッド及び資材はケミクロンGで消毒する。	1. 土壌消毒の項を参照。 2. ケミクロンGは強力な酸化剤のため、取り扱う際には次の事項に注意する。 (1)消毒は日陰で行う。 (2)金属類に使用した場合には必ず水洗いする。

えだまめ（野菜類・豆類(未成熟)）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
さ び 病	1. 収穫後の茎葉、莢穀は堆肥にする等処分する。 2. 発病ほ場は収穫後直ちに耕起、反転し、罹病葉の腐敗、分解を促進させる。	1.初発生後病勢の進展が著しいので早期発見に努める。
炭 疽 病	1. 種子は健全な莢から採集したものを用いる。 2. 被害茎葉や莢は集めて処分する。	1. 収穫期に長雨が予想されているときには、やや早めに収穫して乾燥させると子実の炭疽病の被害が軽減できる。
ウイルス病	1. 種子は無病株から採取し、褐斑粒を除いて使用する。 2. アブラムシ類を防除する。	1. 種子及びアブラムシ類によって伝染する。

さやいんげん（野菜類・豆類(未成熟)）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
モザイク病	1. 種子は無病株から採取する。 2. 幼苗期からアブラムシ類の防除を行う。	1. 病原ウイルスは種子またはアブラムシ類により伝染する。

さやえんどう（野菜類・豆類(未成熟)）

病害虫	防　除　方　法	防除上の注意事項
こうがいかび病	1. 収穫後は被害株を畑に残さないように取り除く。	1.夏まき栽培で秋期に高温、曇雨天が続くと発生が多い。 2. 本病はこれまでこうがい毛かび病と呼ばれていた。
つる枯細菌病	1. 連作を避ける。 2. 種子は無病ほ場から採取したものを使用する。 3. 排水をよくする。	1. 軟弱徒長にならないよう肥培管理に注意する。 2. 風の強いところでは防風ネットなどで風ずれができないようにする。 3. ほ場周辺のカラスノエンドウ、シロツメクサ、ヨモギ、スズメノテッポウ等で、無病徴ではあるが本菌を保毒していることがある。このため、周辺雑草の除草を行い、刈草を適切に処理する。
モザイク病	1. 種子は無病ほ場から採取する。 2. アブラムシ類を防除する。	
エンドウゾウムシ	1. 乾燥種子を65℃で5分又は70℃で1分の温湯浸漬を行う。 2. 種子は晴天時に直射日光で乾かす。	1. 年1回の発生。倉庫の隅や野外で越冬し、開花期にエンドウに飛来する。 2. 産卵は4月下旬～5月下旬に若いサヤの上に行われる。

未成熟そらまめ（野菜類・豆類(未成熟)）

病害虫	防　除　方　法	防除上の注意事項
モザイク病	1. 種子は無病株から採取する。 2. アブラムシ類の防除を行う。	1. 病原ウイルスは種子またはアブラムシ類により伝染する。
ソラマメゾウムシ	1.種子は65℃で5分、70℃で1分の温湯浸漬し、幼虫を殺す。	1. 温湯浸漬は収穫後なるべく早く行う（遅くなると子実内の食害が進む）。 2. 成虫は年1回の発生で倉庫の隅や野外で越冬し、開花期にソラマメに飛来する。